

東三河 地域研究

平成29年1月16日発行

編集・発行：

公益社団法人東三河地域研究センター

住所／豊橋市駅前大通2丁目46番地

(名豊ビル新館6階)

TEL／0532-21-6647

FAX／0532-57-3780

通巻141号 2016. 10. 29

公益社団法人東三河地域研究センター・愛知大学三遠南信地域連携研究センター共同シンポジウム

共感が生んだローカルメディアのつながり ～3.11を契機とした県境を越えたネットワーク～

パネルディスカッション

【パネリスト】 吉田 圭氏 NPO 法人エフエムあおぞら理事長(宮城県亘理町)
森 憲一氏 宮城県山元町 前教育長(宮城県山元町)
森 包義氏 (株)エフエム豊橋 代表取締役社長
前川 緑氏 (株)エフエム豊橋 ラジオパーソナリティ
西村なぎさ氏 (株)エフエム豊橋 ラジオパーソナリティ

【コーディネーター】 戸田敏行氏 愛知大学三遠南信地域連携研究センター長、教授



当センターと愛知大学三遠南信地域連携研究センターの共同シンポジウム『共感が生んだローカルメディアのつながり〜3.11を契機とした県境を越えたネットワーク〜』を東三河地域問題セミナー第1回公開講座として、平成28年10月29日(土)午後1時15分から愛知大学豊橋キャンパス6号館611教室で開催した。

1. 挨拶（愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長、地域政策学部教授 戸田敏行氏）

越境の中には離れたエリア、地域同士の越境も非常に重要です。特に大災害では、近い地域同士は同時に被災をしますから、遠方とどのような繋がりをつくっておくかが重要です。越境して繋がるには、繋がるきっかけと持続する共感が必要ですが、とても難しいことではないかと思われまふ。宮城県の亘理町と山元町は、3.11の被災をされたエリアです。私ももいつ災害が起きるかも知れまふ。その意味で、県境を越えて、越境するネットワークをつくっていくことは重要で、その中でローカルメディアがどのように役割を果たしたかは、大変に興味深いことです。今日は、東三河地域研究センターと、共同でシンポジウムを開催させて頂きました。最後まで、どうぞよろしくお願いいたします。

2. パネルディスカッション

【愛知大学教授 戸田敏行先生（以下、戸田先生）】

今日は、話を三つに分けて進めます。最初にエフエム豊橋の皆さんから伺います。それから、二つの地域（亘理町、山元町）から話を頂き、聴講者と一緒に話を進めたいと思います。最初に森社長さんからエフエム豊橋と亘理町、山元町との関係をお願いします。

【森包義氏（以下、森社長）】



後ほど、東北復興ツアーに至ったきっかけを言いますが、ツアーは、2013年9月に第1回を行い、それから2014年〜16年の各5月に行っています。実は0回目があり、エフエム豊橋の人間が、どこへ行ったらよいのかを考えるために2013年3月に行いました。

これは新幹線の中です。30〜40人のツアーでこれからどこへ行き、何をやるかを説明しています（写真-1）。現地では語り部さんと一緒にバスに乗り込んで頂き、現地の方の声で、現地を見ながら聞かせて頂いています。

これは現地の子供達が自分の想いを書き込んだ黄色いハンカチです（写真-2）。子供達がどのように思っていたのかを感じます。力強い言葉が沢山書かれていました。「きっと、あと何年経った時も、僕たちは笑っているんだろうな」という言葉が出てくるのは、子供達の強さだと思います。これは「女川桜守りの会」で、ここへ来たらどうしても桜を植えたい、10万本桜で桜のまちを復活させたいという想いでやっている人たちです（写真-3）。

2011年3月21日から放送を開始した山元町臨時災害エフエム局「りんごラジオ」です（写真-4）。これがスタジオだとはわかりまふよね。机の上に機材を置いてやっていたという臨時災害エフエム局です。

これが中浜小学校で、子供達が2日間過ごした屋上にある避難小屋です（写真-5）。寒いですし、周りは水だらけで励ましながら頑張ったということです。

このような形で全てをそのまま、重さがある想いを伝えたいというシャレもあるのですが、全ての応援金を現物として持っていつています（写真-6）。何故、このようなことが始まったのかは、前川から伝えます。



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5



写真-6

【前川緑氏（以下、前川氏）】

エフエム豊橋でラジオを担当しています前川緑です。私の故郷は宮城県の仙台市です。こちらに住んでいてもラジオのプレゼント（仙台土産）を自費で買い、勝手に仙台応援大使の気持ちで故郷を応援しています。



5年前の3月11日、金曜日の担当で生放送中でした。豊橋もゆったりとした気持ちの悪い揺れが続きました。もう少しで放送が終わるという時間帯、「皆さん、まずは身の安全を守ってください」「火を消してください」というアナウンスをしました。気象協会から届いたファックスには震源地「宮城県沖」となっていました。

高校生の時に宮城県沖地震を体験しました。震度6ぐらいの揺れだったと思います。家具の下敷きになってしまった友人がいたり、建物が倒れたり、ブロック塀が壊れたり、ライフラインも止まり、とても怖い思いをしたことを思い出しました。

家に帰ると、テレビで盛んにニュースが流れており、私が住んでいた若林区でも何百人の遺体が発見されたというテロップが流れていました。何もできませんし、してあげられません。そして、私なりに考えました。まずは応援でき

る何かを集めよう。最初は、近所の人で、私の故郷が仙台だと知っている方が、千円を封筒に入れて渡してくれました。そこから、みんなで千円ずつ入れてくれるようになり、少しずつ増えました。お金も集まり始めましたので、当時ディレクターだった西村さんに相談したら、「番組で呼び掛けましょう」と言ってくれました。

震災から1カ月後、おじは津波で亡くなっていました。お婆の安否を確認してから宮城県へ向かいました。その時、ラジオのリスナーの皆さんが、ウェットティッシュ、日本酒を渡してくれました。赤ちゃんの布団もあり、車に詰めました。松島でかろうじて宿を取ることができ、従姉妹に「何がしたい」と聞き、「洗濯がしたい、髪を染めたい」と言われたのでドラッグストアで白髪染めを買い、ホテルへ連れて行き、髪の色を染めました。私ができたのはそれだけでした。

それから、仙台市へ行きました。学校時代の友人の家を回りました。「よく来れたね」と驚き、すごく喜んでくれました。近くても状況は様々で、「何かできることある」と尋ねますと、「とにかく仙台のことを忘れないで。遊びに来て欲しい、いいところを見て欲しい」と言われました。「わかった、いっぱい連れてくるね」と、私はその約束を破りたくありませんでした。

【西村なぎさ氏（以下、西村氏）】



ツアーの1回目として、皆さんと行く前に、私と社長と前川で下見に行きました。縁もゆかりもなく、友達がいるわけでも親戚がいるわけでもありません。一度も東北へ行ったことがな

く、興味もありませんでした。

あの映像やニュースを見て、「何がどうなっているのだろうか」「何が起きているのだろうか」「どうすることができるのだろうか」と、テレビの前で見ていることしかできない自分をもどかしく思いました。ディレクターは形づくりをして発信していくことをサポートする役割ですから、身近にそういう思いの人がいましたので、私にできることは、「きっとそこだろう」と思いました。すごく深い縁ができた気がします。

【戸田先生】

こうして東北の訪問が始まったわけですね。どうして山元町・亶理町だったのでしょうか。森社長からお伺いしたいと思います。

【森社長】

私は今の仕事の前にガステックサービス㈱におりました。地震が起きた時、厚生労働省から東北の霞目駐屯地へ酸素を持ってくるようにというファックスが届き、緊急車両を運転し、4名で酸素を仙台へ運びました。地震から3日目の朝に出掛け、夕方には着きました。仙台支店には18名の社員がいたので、彼らを救うため、食べ物や生活必需品も持っていました。

エフエム豊橋の社長に就任したのは、2012年8月で最初に口を利いてくれたのがこの二人でした。二人が「お金があるので東北に届けたい。自分たちで届けたいので休みが欲しい」と言いに来ました。「ちょっと待て、そこまで深い想いがあるなら番組をやるかな」という気になりました。

それで、どこへ行けばいいのかということになりました。わからないので、現地の人に尋ねました。その時、できれば福島より北で復興の支援が行き届いていないところへ行きたいと支店の職員に注文を出しました。偶然、お客様で亶理町のガソリンスタンドの方がみえたり、町会議員等の縁から、亶理町と山元町と話ができるようになり、0回目の下見で吉田さんの「あおぞら」と役場へお邪魔しました。

現地では、我々は沢山来ているマスコミの一人でしたが、「こうしたい」という想いがあったので、そ

れを一生懸命に伝えるために行きました。

ツアーで実際に行って現状を見て頂くことが一番早いということで、人を集めることになりました。色々な企業の皆さんから「おまえが行くんだったら金を出してやる。持っていけ」ということもあり、お金を全て100%届けに行くという想いで、この番組が始まりました。お金は、「ありのまま」ということで、1円玉も5円玉も全て頂いた形のままで持っていました。スーツケースに詰め込み、お札にすれば軽いですが、これが私たちの想い(重さ)を背負っていくことだと思いました。

【戸田先生】

吉田さんは豊橋市から来た時にどうでしたか。

【吉田圭氏 (以下、吉田氏)】

最初に来て頂いた時、役場から「エフエム豊橋の方が来ているから、これからスタジオに案内する」と言われました。「ふうん」と言いましたが、「豊橋ってどこだろう?」「愛知県の豊橋から、どうして来てくれるんだろう」とも思いました。災害放送を始めた後、ラジオをやっている全国の方、例えば、神戸にあるコミュニティ放送の方や京都の綾部市の放送局の方が、尋ねて来ました。ラジオの方は、日頃住んでいる方々と身近に接しているから、災害時には、「大変だ」ということがわかってきてきているのだと思いました。「ラジオをやっている人って本当に熱いんだな」と思いました。ただ、「エフエム豊橋」と聞いた時は、「なぜ豊橋の人が亘理町に来るんだろう?」と思いました。



何故かと言いますと、まず亘理町の「亘理 (わたり)」という字が読めない字ではないかと思います。全国広い中で、どう亘理町のことを知ったのかわ

かりませんでした。何故亘理町や山元町に来て下さったのかの理由がわかったのは昨日でした。

昨日、森社長と「前の会社の支社があつてね」という話を初めて聞きました。前川さんが仙台市出身ということは知っていましたが、そこに数々の人の縁が結ばれて、南東北の本当に小さな二つの町に、豊橋市から来て頂いたことがわかって驚きました。数々の縁を辿って、私たちのところに来て下さった訳です。仙台支社の社員の方が亘理町の人を知っていたこと、山元町のことを知っていたことで、「あそこは、どうもマスコミに余り取り上げられていないらしい」ということを、森さんに話して下さったので、来て頂くことができたわけです。

2013年の時は「わあ、ありがたい」と強く思うところにまで至らずにいましたが、5年後にして初めて「ああ、ありがたかった」と身に染みているところです。皆さま、本当にありがとうございます。

【戸田先生】

徐々にわかっているというのが実態のようです。先ほど食事をしながら、初めて知ったこともありました。西村さん、最初に行かれたときにはどうでしたか。

【西村氏】

仙台駅で下りて、緑が多くて美しい町で、本当にテレビで見た映像のような、津波が襲ってきたところなのだろうかと思いました。見て回る中で、あるところを境に景色が一変しました。それまでカラーだったものが、境界線を越えた瞬間に、全部グレーや茶色といったモノトーンでした。その目の前の光景がすごく怖かったです。日が傾いていくと、取り壊されていない、津波をまともに受けた家が影になって見えます。ゴーゴーと吹く風の音の中に、不気味に立ち残っている家やガラスも何もない窓からカーテンが風に揺れて出ていたりする様子を見た時、恐怖とか、怖いというよりも「無」であるという、言葉にならない感じがしました。

これからツアーをすることを考えるために来たけれど、本当に何か役に立つのだろうか、どのように皆さんを案内して伝えることができるか。番組も始

まっているのに、どうしていくのだろうか。今日も自分の言葉のなかでは見つからない言葉が多かったりするのに、その光景の中で、色々な不安ばかりが頭を巡っていきました。

ただ、ここに皆さんと一緒に来ようと思ったのは、食べ物がおいしかったからです。笑い話にするつもりはありませんが、「生きる意味って何だろう」「どのようにしたら有意義なものになるのか」とか、色々難しい言葉や考え方はありますが、単純に一日中動き、食べた「はらこ飯」がおいしくてすごく幸せを感じました。「それが生きていること」なんだろう。この幸せを共感できる人を増やそうと思いました。

【戸田先生】

今日の題は「共感」です。共感を持ったということです。色々な災害があると、日頃身にまとっているものが全部なくなってしまいます。その時に、「共感」が出てくるということかも知れません。

ローカルメディアの繋がりですが、何故ローカルメディアなのでしょう。前川さんはご自身としてご親戚を亡くされたり、故郷の若林区が災害を受け、二つの立場になるかと思います。その中でローカルメディアができること、仕事をしていて、東北へ行かれる、あるいは亘理町や山元町へ行く等、ローカルメディアの役割をどのようにお考えでしょうか。

【前川氏】

エフエム豊橋はとてもフットワークが軽い。大きい放送局は、何か自分が行動を起こしたい時には書類を回すとか、色々あります。普段でも何かものを紹介する時、大手の企業になればなるほど、電話一つ出てもらうことが大変です。ファックスを送れ、部署が違うということがあります。エフエム豊橋もエフエムあおぞらさんもそうですが、「今度、出てもらえますか」と言えば、「いいですよ」と言って下されば、後は時間調整だけです。情報は思い付いたところから、どんどん古くなります。その情報が枯れないうちにやり取りができることが、ものすごく魅力的でいいことだと思いました。

【戸田先生】

森社長は、応援ツアーを通じてローカルメディア

「エフエム豊橋」として行かれていますと思いますが、ローカルメディアだからできることについていかがでしょうか。

【森社長】

豊橋市を中心にした東三河のエリアで、例えば、天気予報一つとっても、豊橋地域でひとくりになっているのが、一般的なメディアです。ローカルメディアは、その中にもう少し細分化された、豊橋市石巻地区であったりというように、細かな分野まで把握していなければいけない。亘理郡でも、亘理町と山元町があります。山元町の様子はわかっても、亘理町はわからないということがあってはいけません。災害時、これが一番大きな力になることを吉田さんに教えて頂きました。我々も色々な形で臨機応変にできるネットワークの良さを一番強く前に出していきたいと思っています。

私どもは、たまたまケーブルテレビ局と一緒に進めており、まずはケーブルテレビ局でできるところまではケーブルテレビでやります。伝える時には、ラジオを通して皆さんにお伝えします。災害時も、うちの社員が災害対策本部に常駐して情報を流しています。大きなラジオ局やテレビ局ではなく、小回りの利く会社だからできていると思っています。

スマートフォン等の様々な媒体で、色々な情報を得られます。その中でも、何故ラジオなのかということですが、私はラジオから聞こえる声は、本当の声が聞こえてくると思っています。

【戸田先生】

ここから、吉田さんと森先生に話をお伺いします。臨時災害放送局を立ち上げられ、これまではなかったものが、これを契機にしてできたということで、私も驚きました。その話を吉田さんにお願いします。

【吉田氏】

私は宮城県亘理町からまいりました。おかげさまで、5年で町も復興してきましたので、今年の3月24日で臨時災害放送局を閉局しました。臨時災害放送局は、自治体の首長が自治体の情報を流すために立ち上げるもので、首長が免許を申請して始まります。「エフエムあおぞら」のNP0では、町から委託を

受けて運営をする形でした。役場から「だいぶ復興したので臨時災害放送局はもういいんではないか」と言われ、「臨時災害の放送の使命は果たした」と思い、3月24日に閉局いたしました。3月24日に閉局したのは理由があります。総務省の免許は3月31日まででしたが、立ち上がった時が3月24日の午後4時でしたので、閉めるのも3月24日の午後4時に閉めました。5年間ぴったりで終了しました。その間、エフエム豊橋さんとは、月に一回、電話で声のやり取りさせて頂きました。私どもの町では、流すように番組のアレンジができませんでしたが、豊橋ではエフエムを通じて亘理町という名前を知って頂くことができたことが本当に幸せだったと感じています。

何故私が臨時災害放送局の運営の委託を受けることになったのかについてですが、最初、町はやるつもりはありませんでした。そこで、私が「やりましょう」と役場に言い、そういうことになりました。

亘理町は全面積（約72km²）の50%が浸水しました。亡くなった方が306人、建物被害はあわせて6,221棟という大きな被害でした。3月11日の時点では、テレビは映りませんし、電話も通じませんので、自分の周りしか見ることはできませんでしたので、大きな災害が起きていたことがわかりませんでした。そして、大きな津波が亘理町にきました。

3枚の写真がありますが、偶然にも3枚とも同じ角度から写している写真です(スライド-1)。

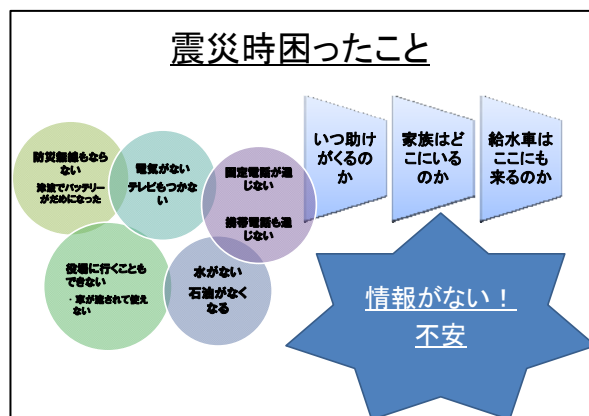


スライド-1

一番上が被災前の「鳥の海」という内海（汽水湖）を写したものです。2枚目が、3月11日の午後3時51分に津波が押し寄せた時です。その下が、津波被災後の写真です。

揺れが収まった時、まず思ったのは小学校4年生の娘を迎えに行くことでした。小学校に迎えに行き、帰ってきた後、近所の奥さんたちと、「どうする？どうする？」と言っているうちに、防災無線で「大津波警報です。次の地区の方は避難をして下さい」とありました。読み上げられた地区にうちの地区の名前はなく、海から2.5km離れているので、「大丈夫なんじゃない」と話していました。1時間経過し、午後3時51分に大津波が到達しました。1時間強あったのですが、うろろうしていただけでした。隣には母が住んでいましたが、ちょっと目が悪い母が玄関から駆け込んできました。母の足はずぶ濡れでした。「とにかく2階に上がろう」と言って、2階に上がりました。あの時、母がもう一步遅ければ、足を取られてしまい、もしかすると、今、一緒にいることができなかったかもしれないと思います。

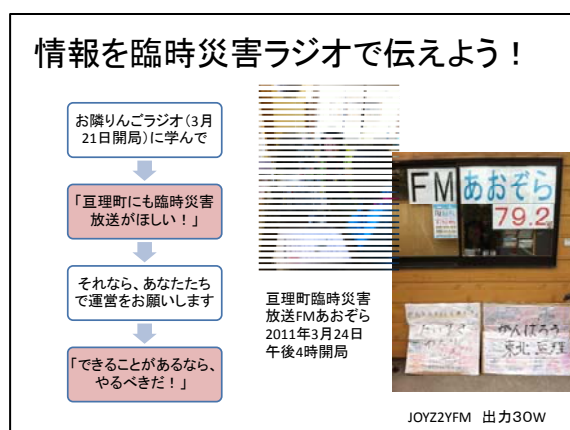
防災無線は1回目の放送があったきりでした。電気はつきませんのでテレビも使えません。何が起きているかがわからない。役場へ行きたくても、役場までは歩くと2時間ぐらいかかります。固定電話、携帯電話、双方とも通じない。いったい何がどうなっているかわかりませんし、いつ助けが来るのか、家族はどこにいるのかもわかりません。夫と娘とは全く連絡が取れませんでした（スライド-2）。



スライド-2

給水車が来るのであれば、ここに居てもいいですが、水が使えないと暮らせません。石油も減るし、いつ電気がつくかわからない。情報のなさで不安ばかりでした。「情報はインフラだ」とよく言われますが、そのことを初めて身をもって知りました。

幸いなことに、隣の山元町で臨時災害エフエム「りんごラジオ」を立ち上げられた高橋さんとは知り合いです。周りには何もなくなり、つてを頼りに高橋さんのところへ避難させて頂きました。その時、山元町で「りんごラジオ」の放送が始まりました。「りんごラジオ」は、3月21日に開局しました。「臨時災害放送局って何だろう？」と思いながらお手伝いしました。「誰が、この放送を聞くの」「だって、NHKじゃないんだからラジオをやっても誰も周波数を知らない、どうなるんだろう」と思っていたら、役場に来た方が周波数をメモして帰るのを見ました。「こうやって、みんな聞くんだ」と思いました（スライド-3）。



スライド-3

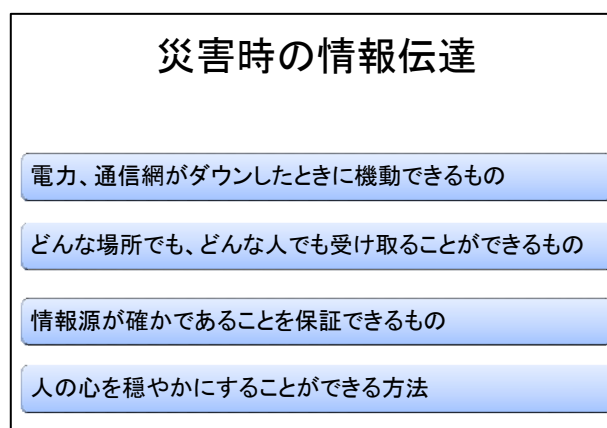
翌日、「ラジオ、聞いたんだけど」という方が来ました。私が欲しかった町の情報を、町のラジオで伝えることができることを初めて知りました。ただ、それは隣町の放送で互理町の放送ではありません。「互理町にも欲しいな」と思い、互理町役場に行き、「臨時災害放送局があるんです、放送しませんか」と言いました。役場も庁舎が崩れてしまって使えないため、テントで役場の業務を行っていました。「とても放送をする余裕はありません。やるのであれば、やってくださいますか」と言われました。何故、役場では情報を流すことができないのか。「情報って大事じゃないか」と思った時、私でもできるのではないかと思いました。

「りんごラジオ」を立ち上げる時、手伝ってくれたのが中越地震を経験している新潟県の長岡市のコミュニティ・エフエムでした。使わなくなった放送

機材を持ってきて、アンテナも新潟でつくって届けてくれました。その長岡市の放送局に、ずうずうしいと思いましたが、「私たちも放送をしたいんで手伝ってくれませんか」と頼みました。「わかりました」と言って下さり、放送局の申請と機材を運んで来てくれました。それで3月24日に放送を開始しました。

色々なメディアで、「主婦が放送を」と取り上げて頂きました。何故できたのかと言いますと、コミュニティ放送局のローカルメディアの繋がりがあったからです。その時、「自分たちにやれることがあるなら、やれることをやろう」と思ったからです。

臨時災害放送を担当して痛感したことは、電力や通信網がダウンした時に機動できるものを、必ず担保しておく必要があります。大事なことは、どのような場所でも、どのような人でも受け取ることができる、目の見えない方も受け取ることができる情報でなければいけないということです。（スライド-4）家から出られない老人も受け取れる情報でなければいけません。



スライド-4

そして、情報源が確かかだということです。エフエム豊橋さんは行政と災害協定を結んでいます。「あそこの情報は確かだ」でなければデマに繋がります。「あそこの情報だから信用しよう」も大事です。

そして、「人の心を穏やかにする人の声で伝えて欲しい」ということです。今はメール配信等がありますが、緊急地震速報などをメール配信で見てもわからないことが多すぎます。「どこ地区、どこ地区、明日通水されます」「明日になったら水が出る」と思うわけです。そういう温かい声で、できることならば、

よく知っている人の声で聞きたい。安心して、「明日までは、水がないけど我慢しよう、頑張ろう」と思えます。そういう情報を届けられるラジオは素晴らしいのと、この5年間、痛感しました。

【戸田先生】

4枚目のスライドの4行は重いですね。亶理町の経験談から出てきた大きなことです。続きまして、森先生お願いします。

【森憲一氏（以下、森先生）】

宮城県の山元町からまいりました森です。話をする前に、一言だけ、エフエム豊橋さん、愛知県の皆さまに、山元町は本当に助けて頂きました。震災直後、1,081名の豊川市の自衛隊の特科連隊の皆さんに入って頂きました。これまでも、豊田市、豊川市、半田市、岡崎市等々から沢山の職員の派遣や、町の復興支援をして頂いています。本当にありがとうございます。



山元町では、3月11日の死者が636名、本町で亡くなられた方は674名です。亶理町の約倍以上でした。町の37%、約4割が水に覆われました。私は昭和23年生まれですが、このようなことが起きるとは信じられませんでした。海は砂浜の海岸です。津波はリアス式海岸の入り江になったようなところを、奥深く突き刺さっていくと思っていました。ですから、「まさか」というのが正直なところでした。

海岸には二つの小学校がありました。当時、私は役場の3階で仕事をしていました。地震が起きた時、全く動けませんでした。戸棚は倒れる、ガラスは碎けるという状況でした。その後、学校にすぐ連絡をし、子供の安全確保、子供の命を守って下さいということが1点、それから、避難所運営の準備をしな

さいという2点を指示しました。しかし、途中で電話は通じなくなり、公衆電話まで走って行きましたが、これも途中で通じなくなりました。

浜通りにあった二つの小学校のうちの 하나가、中浜小学校です。体育館の床がめくれ上がり、砂やガラスの破片で一面が覆われています。見学に来られた方からは、「天井が落ちたのですか」と言われますが、床がめくれ上がってしまった状態です。もし、ここに子供達を避難させていたらと思うと、大変でした。寄せる波も大変ですが、引き波の方がむしろ強いというのが、私たちの教訓です。

被災した時、私は役場におりました。役場や役場の隣の公民館には、次々と避難される方が押し寄せてきました。建物の中だけでは間に合わず、外にテントを出しました。役場には、備蓄しているものはほとんどありません。毛布も食べ物もありません。そこで隣近所から、「毛布はありませんか。布団はありませんか」と言って分けて頂きました。しばらくすると、避難所では「お年寄りのオムツはありませんか」「赤ちゃんのミルクはありませんか」と聞かれました。「お年寄りのオムツも赤ちゃんのミルクも必要なんだ」と気づきました。その状況で、初日が始まりました。夕方には家族や友人、知人が無事なのかという問い合わせが次々と来ました。電話は通じませんので、歩いたり、車で来たりしていました。

初めに大きな力を果たしたのが、役場前に設置した伝言板です。小さな紙切れや広告の紙等に「何々地区、何の誰々、無事だよ」「ここに知らせてください」などと書かれたメモが、伝言板に次々と貼り出されました。役場に受け付けを設けましたが、避難所の名簿さえできていない状態でした。

それから様々な情報を、いったいどのようにして伝えればいいのだろうかと考えるようになりました。その役割を果たすのは誰か。役場の若い職員は、それぞれの仕事があり、ある意味で自由が利くのは私かなと思いました。毎朝、避難者に、食事を出しますが、何十mと長蛇の列ができます。その時、「本日のお知らせ」として、ハンドマイクを持って、避難をされた皆さんにお伝えする仕事を始めました。

朝食時ですから、仕事が始まる 8 時半前です。例えば、これは 3 月 23 日水曜日の当時の原稿です。はじめに天気予報。今日は晴れときどき雪です。最高気温は 7 度。被害状況。山元町はこれまでの発見数が 431 人、行方不明が 465 人。昨日は 17 遺体を発見しています。水没しているワゴン車、トラック等も確認されていますと、情報を伝えました。それから、自衛隊が 1,053 人、車両 258 台、愛知県隊 150 名、町の消防団 120 名、兵庫県隊 220 名、このような方々のお力添えで、今、動いていますということも伝えました。各市町村から派遣頂いたボランティア活動や医療関係のことも伝えました。給水活動、水道、電力、電話、風呂も同じです。

3 月 21 日に「りんごラジオ」が設置されました。本当に情報の要、私たち町民の命とも言うべき情報を発信して頂きました。役場も被災し、防災行政無線が使えない状況でした。震災直後、県に情報が伝わったのは 3 日後と聞いています。町民は毎日毎晩、不安だらけの中で過ごしていました。10 日後に、「りんごラジオ」が立ち上がり、搜索活動や様々な支援活動の情報を得られるようになりました。町民にとって、地域に密着したかけがえのない情報を提供して頂きました。

これも誰かがやらなければなりません。後になり、「何故、教育長がスピーカーを持ってやっているんだ」という非難を浴びました。避難所運営の責任者として「別な仕事があるのではないか」という批判がありました。では誰がハンドマイクを持つのか。そこで「俺しかいない」という思いでやりました。高橋さん(りんごラジオの責任者)も、誰かがやらなければいけないという使命感で、「りんごラジオ」を立ち上げられた訳です。

【戸田先生】

生きるための情報という印象を持ちました。伝言板に「ここにいるよ」ということを貼る。最初に知りたい情報です。そして、スピーカー、ハンドマイクでの情報、それから電波によって伝える。それが被災地での生活を支えていることを非常に強く感じました。エフエム豊橋さんが来られて 4 年が経ちま

した。地域の生活を担うローカルメディア同士の繋がりが、出来たと思います。そうした心が通い合う、共感する関係は、どのようにしてなってきたのでしょうか。



【吉田氏】

はじめは、どのような土地であるかもわからないところから来て頂いた方も、一度会っただけでは、直ぐには記憶に残りません。4 年間で月に 1 回、声を聞いておしゃべりする。1 年に 1 回、実際に来て頂くようになって、顔を拝見するようになりました。亘理町にいる時間は 2 時間程度です。「じゃあ、また」と言って、バスに手を振る程度ですが、ラジオで声をやり取りしていると、本当に知らない人ではないということです。インターネットも便利ですが、実際に聞いたり、間合いを計ってしゃべったりすることで、初めて心が通い合うものだと思います。

【戸田先生】

同じ使命を持っておられるので、そこで通じ合うことも大きいのではないかと思います。これはこちらの状況でもあるかもしれません。森社長、いかがですか。

【森社長】

今の言葉に全て集約されています。我々は 4 年間続けてまいりました。私たちにできることは、地域のためのインフラとして情報をしっかり伝えること、市からの情報を正確にお届けすることが役目です。声で発信をしているわけですから、本当に伝えたいのは自分たちの想いなのです。

先ほど「重い荷物を持っていく」ことを言いました。その想い、現地へ実際に行ってみるこ

とによってわかったことを伝えたい。そこに新しいものができ、一人でもいいから、その中の方を自分の方に引きずり込んでもらいたいと思っています。

災害時のエフエムで、お互いに繋がりを持ちながらやっているわけですが、その繋がりには 1 日や 2 日でできるものではありませんし、1 年でできるものもないということを今回のツアーで確信しました。1 回目に行った時は、「また、来るね」と言いましたが、2 回目に行った時に「本当に、来たんだ」と言われました。3 回目に行きますと、「やあ」という感じで、4 回目に行ったときには、みんなでハグしていました。やはり、1 回だけでは絶対にできません。2 回、3 回、4 回と続けていくことに意味がある。行くたびに、本当に皆さんの顔が変わっていくのが、非常に印象的でした。

【戸田先生】

ここで、森先生から山元町の状況、特に学校は、災害のときに大変大きな役割を果たします。ある意味では、それは責任を問われる部分もあります。山元町では、中浜小学校、先ほど見せて頂きましたが、大変全国的に知られるケースもあります。それも踏まえてお願いします。

【森先生】

2 階の天井部分まで水が来た中浜小学校は、海岸からわずか 500m 足らずの学校でした。今までは 6.2m の堤防があり、松林があって学校があるという場所でした。学校の屋上に上がっても、潮騒は聞こえるが、海は見えない学校です。視察に来られた方は、「こんな近くに学校が建っていたんですね」という質問を何回か頂きました。中浜小学校では、丘に逃げる道も探りましたが、気象庁の災害情報で、10 分後に 6m の津波が来るということで、子供達の足では、丘の坂元中学校まで行くには、20～25 分掛かり、とても行くことができないので、校長の判断で屋上へ避難させました。結果はよかったのですが、もしあと 1～2m でも波が高かったら、かな

り厳しい状況だったという報告を受けています。浜通りの山下第二小学校は、浜から 300m ほどでした。ここは校長の判断で、子供達を校庭に避難させ、迷っている時に、地域の方から声を掛けられ、先生方の車で分乗して丘の役場まで逃げました。間一髪でした。あと 10 分、15 分遅かったら、かなり厳しかったと思います。結果として、両校とも大きな犠牲を出すことはありませんでした。私も教育委員会の立場で、学校に指示を出しましたが、子供達の安全確保をなさいという大くくりなものです。各学校で事情は違いますから、所属長にお任せするしかありません。所属長が地域のことや学校の様子をよく知っているわけですし、避難道をどのように逃げればいいのかも知っていますから、子供達の命を任せるしかありません。後は私自身が覚悟を決めるしかない、その思いは今も変わりません。

こうした子供達 90 名の命や地域の方も含めて助ける中で色々な葛藤やいきさつがあったと聞いています。例えば引き渡しです。他の市町村でもありました。子供達を避難させる前に、保護者が駆けつけて、「うちの孫を帰してくれ。うちの孫は私が守るから」と言われます。しかし、途中で波にのまれてしまうということも多くありました。やはり、学校と保護者、あるいは学校と地域の普段の信頼関係がどこまで築かれているのか、どこまで約束事ができるのかということです。中浜小学校では、校長は「学校の屋上に上がって下さい」と話をしました。「うちの子どもは家に連れていくから」ということで、「家に連れていくんじゃないくて、丘に逃げて下さい。そういう約束なら渡しますよ」と話し、結果として助かったわけです。戻ってこない命ですので、十分な対策を練っておく必要があると思います。

10 分後に津波が来るのに避難には 20 分以上かかるという中で、校長は屋上への避難を判断しました。実際 1 時間後に津波は来ましたが、

そのうちに 6mから 10mの津波が来るという情報に変わりました。校長の判断は、咄嗟の思いつきではなく、日頃から教頭と「もし万が一のときには、ここに避難をさせよう」とか、「ここはこういう状況だから、ここに入れよう」と、色々と策を練っていたということでした。マスコミでは「咄嗟の判断」「瞬時の判断」等と言われますが、日頃からそういう対策を考えていたのではないかと思います。

それから、学校の先生が尽くしてくださったのは避難所運営です。避難所の運営は、役場の職員も派遣をしますが、中心になるのは地域の人で、学校の管理職です。学校と地域が普段からよい関係になれば、避難所運営はできないと思います。メディアの臨時災害エフエムでも、発信する側と受け取る側の信頼関係が必要です。

「この情報は間違いない。ここで発信する情報は間違いない」という信頼関係のもとにラジオを聞く、あるいは流すという関係にあるのではないかと思います。

避難所の体育館には何百人もの人が避難しています。衝立もありませんし、着替えをするにも不便です。「間もなく、衝立を用意しますから、しばらくお待ちください」と話をしたところ、避難所運営の責任者の方が、私より年配でしたが、「いいんだ教育長。俺たちは何も要らない。俺たちはみんな、大きな家族だから、そんな衝立なんか要らない」と言って下さいました。運営リーダーの懐の深さ、避難をしている他の地区の人たちをまとめ上げていく気持ちがなければいけないのだと、教えられたことが沢山ありました。

震災直後、沢山のご支援として炊き出しや物品、職員の派遣など、本当によくして頂きました。私たちは感謝を申し上げるしかありません。ただ、受け入れる側で困ったのは、毎日、何件か来るわけですが、その人たちをしっかりと丁寧に受け入れる体制が整っていないことでした。人手も少ないですし、何をどのようにしてもら

ったらいいか、という思いがありました。

初めに十何カ所も避難所があった時には、どの避難所も炊き出し一つにしても、こちらにはおそばが何食分要る、こちらにはご飯がいく、こちらにはラーメンがいくというように、恩恵を受けています。ところが、一定の時間が過ると他のところから「俺たちにはないのか」「俺たち1日2食しか取っていない。そっちは3食取っているじゃないか」と、町民の間に不平等感がはたります。そのため、受け入れを担当する役場の職員は大変悩みました。例えば、初めの支援の申し出の時に「失礼ですが、何食分ございますか」と尋ね、「150食あります」「では、申し訳ありませんが、今回、お断りさせていただきます」と対応した例も幾つかあります。大変な時期で、無我夢中でやっている時はいいですが、落ち着いてきた時、公平さや不平等感が目に付いたと思います。

何と言ってもありがたいのは、継続的に支援をして下さることです。本当にありがたいことです。山元町も他の自治体からも、毎年、そうした団体が幾つかあります。ただ、多くは「何月何日何時」と逆指名されてしまいます。私たちは組織も何も熟していませんし、平常業務もあります。なかなか断ることもできません。支援する側にも都合がありますから、その中でどのように調整するのか、現場としては大変厳しい状況です。

様々な復興、復旧事業を進めるにあたり、本当に難しいなと思ったことがあります。例えば、浜通りにあった野球場やゲートボール場も被害を受けました。こうした事業は基本的に原型復旧で、元どおりに直すのが基本です。「ゲートボールは少し下火になってきたし、団体も少ないので、その分をソフトボール等に変えたい」と提案しても、「前にはそれはなかった」と言われてしまいます。かといって町で行うお金はないので、国にすぎるしかないという状況です。

復興・復旧で一番難しいのは、住民合意をど

のようにして取り付けていくかということ、合意形成が行政の一番の課題です。そのため、説明会や様々な形で意見を頂きます。様々な価値観があり、事情も違います。賛成があれば、反対もあります。どっちつかずもあります。その中で行政は判断をしていかななくてはなりません。これほど苦しいものはありません。例えば、意見交換会を開くにしても、まずチラシで広報しなければいけません。どのような提案をするかも決めなくてはいけません。提案を受けて意見が出たら、どのように応答するかも考えないといけません。何回も説明をしなくてはいけないのは、大変につらいです。先ほどの中浜小学校は、結果として、丘通りにある坂元小学校に統合せざるを得ませんでした。山下第二小学校は、2カ月前に復旧をしました。この話し合いだけで三十数回、昼夜問わず行いました。それでも、反対はあり、賛成もありました。

行政の中で住民合意をどのようにして図っていくかが本当に大きな問題です。しかも、「もう5年もたっているのにというのが口癖のように言われます。私たちは1週間前に町開きをしました。あるマスメディアでの話ですが、「町開きがあってよかったですね」とアナウンサーの問い掛けに対して、コメンテーターは「でも、5年以上かかっているんですよ。遅いですよ」とコメントされました。甘んじて受けざるを得ないような状況もある訳ですが、行政の手続きや復興上の査定を考えますと、それなりの時間は掛かると思います。

震災直後から様々な形で、マスメディアの対応をしました。山元町では未だに「りんごラジオ」という災害エフエムラジオが続いています。私も月に3回ほど出演しました。小・中学校もずっとローテーションを組み、毎日4時から4時半まで色々な情報を伝えてきました。何故、こうしたいい関係を保ちながら、町民にも聞いて頂いているかといいますと、吉田さんも言われましたが、受け取る側も不安を取り除くには、

やはり情報が欲しいわけです。その情報を発信する側と受け取る側の必要性が、お互いに合致しているのではないかと思います。マスメディアでは、取材に例えば30分なり1時間掛かっても、放送で流されるのは僅かです。全体の脈絡の中で発した言葉のごく僅かです。僅かな言葉で見ている方、聞いている方は判断します。実際には全体の脈絡の中で話をしていますが、それは伝わりません。災害ラジオでは、それが十分に伝わっていく部分があります。

ラジオ出演も継続すると、その背景や物事の理解度、あるいは前回までの経過や経緯等をお互いに理解して話をしていますので、とても話し易いと感じます。先程来、でていますように、フットワーク、柔軟性、機動力があります。お客さんが来て、「是非、その人のことを聞かせて欲しい」と思えば、「りんごラジオ」へ走り、「ちょっと時間ありませんか。15分でいいですから」「はい、わかりました」と言って都合をつけます。インターネットでも、どこでも聞くことができます。聴覚障がい者のために文字化して画面に日本語を出して、それで聞いて頂いています。

教育委員会からすれば、普段、「りんごラジオ」を通して地域に情報を発信することはありません。私たちの生の声で、町民の皆さんに子供の安全をお願いしたり、子供達の状況を伝えることができるのは、とてもいいことだと思います。

【戸田先生】

二つのエフエム、三つになるかもしれません。両地域の繋がり、被災と情報、山元町を中心にして起こっていることを話して頂きました。ここまで、ご質問やご意見とかがありましたら出して頂ければと思います。

【フロアー意見】

東海総合通信局、総務省の職員です。実は、ラジオ放送のコミュニティ・エフエムに注目しています。山間部では、ラジオが届きにくい地区があり、山の奥はラジオが届かないところが

あります。それを届ける方法を検討しています。小さい放送局を設置し、CATV で電波を流してラジオを届けることを総務省もやり始めています。コミュニティ・エフエムがない地域だと、立ち上がるまでに、かなり時間が掛かります。吉田さんの NPO 法人も災害が起こったので、団体を設置してエフエム局をつくられたと思います。災害が起こった時に立ち上げるようでは遅いのではないかと思います、全国的に何か PR をして頂きたいと思います。それが無い地域で「こういうことが必要です」ということを訴えかけて頂きたいということが、私の感想です。

私が住む蒲郡にはコミュニティ・エフエムがありません。日頃から海辺の地域に住んでいますので、東北の経験を全国的に広めて頂ければ、全国的に支援をしなければいけないという機運が高まると思います。

【戸田先生】

吉田さんから何かありますか。

【吉田氏】

先ほど言いましたが、発災の時にラジオ局があったらと思いました。防災無線は、注意喚起には適しています。「ポンポンポン」「ウーッ」と鳴れば「何だろう？」と思います。しかし、後の細かいところは聞こえません。車に乗っていると、防災無線は聞こえません。先ほど、「うちのお姉ちゃんがまだ帰ってこない」話をしました。ラジオを始める時に、忘れられない二人の女の子がいます。お姉ちゃんは、私の娘の同級生の姉です。その時、お姉ちゃんは亘理町の非浸水地域の施設へ働きに行っていたそうです。震災が起き、施設長が「揺れたから家に帰りなさい」と言って下さったそうです。彼女の家は、海から 1km も離れていない場所なのに家へ帰ったそうです。もしカーラジオをつける習慣があれば、「大津波が来る。うちは海から 1km だから、戻ったら駄目だ」と思ったのではないのでしょうか。「あの時、カーラジオで情報を聞くことができた」と思いました。

もう一人は娘の同級生です。海から 300m ぐらいに家がありました。おばあちゃんがいるので、ぎりぎりまで逃げずに家にいたそうです。その時、おそらく防災無線は聞こえなかったと思います。「ラジオを聞かせることができたかな」と思いました。

ラジオが全てではありません。ラジオも光ケーブルで繋いでいますから、ケーブルが切れてしまえば放送を発信できません。今は地上基幹局になって、二重にしなければいけないという決まりになったそうですから、強靱化されていますが、コミュニティ放送局も、とにかく放送を担保し、町が複数の情報伝達手段を持っていること、小さい町の単位で持っていることが大切です。

山元町と亘理町では状況は違います。また、もし山間部の小さい町で「北の山が危ない」「ゲリラ豪雨が来ているから危ない」と、一人でいるおばあちゃんがラジオで聞いたら、「そうか」と思って、北とは反対方向へ行くことができます。ラジオ局がないところは、すぐにつくって欲しいです。それを二重、三重に担保できる方法を、役場にも考えて欲しいです。

今日のお話を聞いた方で、小さい町で放送のないところに親類がいる方がいましたら、「ラジオって大事だよ」と話して下さい。そういう機運が全国的に高まればいいなと思います。今、亘理町でも立ち上げようとしています、なかなか全員が「やろう」ということにはなりません。お金も掛かります。その間に災害が来たらどうするのでしょうか。放送を開始するにはお金も必要ですが、市民が放送は必要だと思えばできるケースを幾つも幾つもつくりたい。そして、市民に株主になって頂くという形で、放送できるシステムをつくりたいと思っています。

【戸田先生】

我々のエリアは、エフエム豊橋さんがありますが、エリアが結構広いですね。何か、その点についてありますか。

【森社長】

ロワジールホテルの一番上にアンテナを付けていますが、20年経過し古くなったため、付け替えました。これで今まで届かない区域へ電波が届くようになりましたが、市からは「届かない場所があるのはおかしい」と言われています。我々がやらなければいけないことは、防災ラジオという仕組みがうまく機能することです。市で、防災ラジオを販売して頂き、災害が起きた時には割り込み、最大音量で「今から津波が来ます」というような言葉が出るラジオです。

我々から見ると沢山ですが、お客さんから見れば、一人です。昔、洪水があった時、防災無線が働き、リスナーから、「聞けたよ。ありがとう」という連絡を頂きました。「これだな」と思いました。相手が一人でも助かること、それを目指していかなければいけません。

これからは、アンテナを立てたことと東三河という地域を考えた時、一つのエリアとして見て田原市、新城市、蒲郡市、豊川市、そして、湖西市まで入ってしまうかもしれませんが、生活圈という見方をして、エフエム豊橋を聞くことができるようなサテライトをつくっていかうと検討している最中です。

【戸田先生】

話を聞きながら、一つだけ思い出しました。私は神戸出身で阪神淡路の震災がありました。垂水という少し明石市よりの場所ですが、そこに「ラジオ関西」という中波放送局がありました。日頃は、神戸では全然聞こえませんが、災害時に出力を上げていたのでしょうか、誰が亡くなったかを、ずっと放送していました。遠方でも、一番気になることです。親が助かったのはわかったけれども、他の人はどうなったのか。そういう情報が伝わることは、すごく重要だと思います。神戸全体であれば、とてもそんなことはできません。狭域でないとできません。でも、電波は飛んでいくことを、強く思いました。

【フロアー質問】

出力 30W でカバーできるエリアはどのくらいですか。

【吉田氏】

2011 年は出力 30W でしたが、2012 年から 20W に下げました。コミュニティ放送になった時、届けられるようにするには、20W でもやったほうがいいということでした。それでも町がカバーできます。

【フロアー質問】

豊橋市で廃棄物処理業をしています。東日本震災の時業界として、宮古市、大槌町、釜石市に 20 台 50 人体制で 2 週間ぐらい入りました。現場は混乱し、国と県と事前に交渉しても食い違いがあるし、情報が錯綜していました。さらに「ガソリンがない」ということで、ケンカ状態でした。その中で、BCP(事業継続計画)として決めておかなければいけないということ、愛知県や自治体と交渉してハード部分を進めていますが、やはりソフト部分で予測される問題を想定されると素晴らしいのではないかと思います。マスコミが発信をどうするかは、大事な BCP かと思いますので是非とも期待しています。

【森社長】

先ほどから申し上げていますように、「体験して共感する」、それで実施に繋がってることが非常に強いと思っています。BCP や色々な案は、事例を捉えていくことはできます。しかし、事例を捉えていくことに原動力を与えるところが、今はない。しっかりと動けるような体制、はっきり言えば、これがあれば、心があれば動くという部分もあります。そのためにも、体験し、共感して、実際にその場で経験した吉田さんや森さんのお話を聞きながら、現場へ行き見る。そこで新しい色々な BCP や考え方が生まれてくるのではないかと思います。

今回は前川と私が、東北に関係があったことが繋がりになりました。最初に前川が、それがツアーに繋がるというのは、みんなが共感して体験するということだと思います。

【前川氏】

今まで放送を続けてきて、なるべく「皆さん」ではなくて、「あなた」という一人のひととしゃべっていることを忘れずに放送しています。距離は離れていますが、電波はすごいなと思います。電話でもお母さんの声を聞くとホッとしたりしますが、電波も同じだなと思います。吉田さんのことは、ご無沙汰していた学校時代のお友達というように、感じながら、「今、亘理町の気温は何度かな」というように、ラジオを聞いて頂いている皆さんにも「亘理町ってどんなところ？ 吉田さんってどんな家庭の人？」というように、身近に感じていただけるような放送をいつもイメージしています。

実際に豊橋に大きい地震が来た時、いつも思うのは、私は出勤できるか。ここにいるパーソナリティの何人が、来ることができるのか。その時、来られる人が、一人で色々な判断ができ、最低二人でも放送ができる。その時、間違った放送や内容、だいたいみたいな話をしないようにとか、普段からもトレーニングや意識づけは、非常に大事ではないかと感じています。

【西村氏】

「何かあったときには私が行きます」という気持ちでいます。吉田さんとローカル局同士で、初めてお会いした時、「給水車が今度いつ来るのか」という話が印象的でした。明日、給水車が来るのであれば、今日、ペットボトルの水を飲んでしまっても大丈夫。1週間後にしか来ないのであれば、その水を7分の1ずつにして命をつなぐしかない。大きな災害に遭ったことがないので、その発想すらありませんでした。水はあった方がいいに決まっているが、具体的に命をつなぐ、水がそこまで大事だという実感がありませんでした。その話を豊橋市の皆さんに、経験した吉田さんの声でお届けすることがすごく大事だと思いました。

最初に、「吉田さんに定期的に出てもらおうよ」と言い出したのは前川です。吉田さんにお

願いすると、すぐに「いいですよ」と言ってくださったのもローカル同士だからです。当人同士で約束ができれば、そのまま放送に乗せてしまう。それをできるのもローカル局のいいところですよ。

皆さんも、色々な避難訓練や災害の訓練を実施したことがあるかと思います。小学校でやったような訓練を、大人になってからでも変わらぬ方法でやっているような気がしませんか？ 吉田さんに伺うと、災害訓練を夜にやるのです。それぞれの場所で、発生したとして、皆さんが避難所に行く。「子供達が下校している時間に、災害が起きました」という設定で、避難訓練をすることも聞きました。それも取り入れるべきだと思います。これからローカル局のできることや私たちの役割は、それを伝えていくことでもあります。

復興応援ツアーに参加して下さり、「これではいけない。何かあった時、東北だけじゃなくて、日本各地で色々な災害があった時、力になれるように」ということで、飲食店のオーナーが、「みんなのかけ橋プロジェクト」を仲間同士で立ち上げてくれました。私たちのツアーで持っていく応援金の募金箱を店に置いて下さる等、少しずつですが広がりを見せています。ローカルの強みか、ローカルだからこそ、「ねえ」と肩をたたいて言えるぐらいの距離感が、共感を呼ぶことにもなります。

【戸田先生】

折角ですから、今日、ご出席のなかで応援ツアーに行った方は誰かいらっしゃいますか。西村さん、指名してください。

【西村氏】

それでは山田さん。

【フロアー】

山田と申します。初回、2回、3回目の3回、参加しました。行って本当によかったと思います。テレビの映像、書籍で見るものとは違い、生の目で見た現地の状況が理解できました。中

浜小学校ですか、本当に校長先生は勇気のある決断だったと思います。結果論として、運がよかったかもしれませんが、学校の先生は、立派な仕事をなさったのではないかと思います。

【戸田先生】

吉田さん、こちらに伝えておくべきこと、伝えたいことはありますか。

【吉田氏】

自分だけは大丈夫だと思いたい。自分のところだけは災害は来ないと思いたい。でもそんなことはありません。私も自分のところは、災害はないと思っていました。チリ地震で揺れた時よりも近くで地震が起こっており、津波の可能性もあるかもしれないのに、「大丈夫じゃないか」と思っていました。どうか自分だけは大丈夫だと思わないでください。

避難訓練でも地域でも、色々な働きかけをしていると思いますが、「あのおばちゃん、ちょっとうるさい。炊き出しやるとか言ってさ」と言われても、「一緒にやろう」と言って巻き込んで下さい。「この間、東北に行ってきた」と、その経験を分けてもらったりすると、実感が沸くと思います。実感まで沸かなくても、何かの芽が生まれるかもしれません。

私たちは津波でしたが、ゲリラ豪雨や竜巻等、どのような形で災害が襲ってくるかわからない。今のうちに備えようと思えばできることは、やはりしっかりと担保して欲しいと思います。

家族との連絡方法はしっかり決めた方がいいです。子供の通学路は長いです。通学路のこの場所では、どこそこへ避難する、小学校にいた時は学校から出ない等を決めておきます。そうすれば、家族が心配で災害が迫っているところへ戻ってしまうことはないと思います。とにかく災害があったら、「ここで落ち合おう」「ここで会おう」「こういう場合にはこうしよう」。一つだけではなく、「このパターンの時はこうしよう」と決めておくことがとても大切です。

【フロアー質問】

10年以上前に豊橋市で大きな竜巻が起きた時、私は車で移動中でした。カーナビを頼りに移動しようとしたのですが、「ここも通れないの」というぐらいに、通行止めが多かったことがありました。後から「エフエム豊橋で、ずっと放送していた」ことを聞いた時、「地域で災害があった時は、エフエム豊橋が頼りになる」ことを実感しました。防災ラジオも買いました。私は多米町に住んでいますが、車は大丈夫ですが、少し電波が悪く、多米町でももう少し聞こえるようにして欲しいと思います。もし豊橋市で災害が起きた時、直ぐに「エフエム豊橋」を頼りにしようとする人たちが、どのくらいいるか教えて下さい。吉田さんや森先生のラジオで、発信する側の気持ちはよくわかりましたが、聞いていてよかったという話があれば話して下さい。

【森社長】

頼りになると言って頂けたことは、本当にありがたいと思います。今、わが社への興味を計る指標として、ケーブルテレビとコミュニティ・エフエムの災害時の黄色いラベルのスマートフォンで聞くことができるアプリのダウンロード数で見えています。今、2万件ぐらいあります。このエリアは、豊橋市と田原市と新城市、蒲郡市で30万世帯弱あり、2万人ぐらい人が当てにして下さっているのではないかと思います。多米町で聞きづらいということで申し訳ないです。多米町や石巻町等では入らないエリアが沢山あります。これからの課題として考えます。

【森先生】

山元町の「りんごラジオ」の責任者である高橋厚さんのモットーは、「いい町には『声』がある」です。私も共感しています。番組を見ても、インタビュー形式で、町民の声を拾っています。朝、通勤する方や学校へ通う人、出会った人にマイクを向けています。とてもいいことだと思っています。

教育委員会の立場からしますと、教育委員会と町内にある県立の学校、幼稚園・保育所等全

て含めて、月曜日～金曜日まで4時から30～40分の間、「幼稚園・保育所・学校だより」という番組があります。番組には子供が出演し、内容は何でもいいので、負担感のないよう、長続きするようにとやっています。人口が4,300人も流出している中、町に大きな明るさと活気を醸し出しているのではないかと思います。子供達は原稿を読むのではなく、自分の言葉で感じたこと、聞かれたことを自分の言葉で返します。町民に聞いて頂いていることが、子供達にとっても、教育の場としても、とてもいい役割を果たしているのではないかと感じています。

【戸田先生】

最後にローカルメディアであるからこそできること、ローカルメディアとの連携について一言ずつお願いします。

【前川氏】

今回の震災で、皆さんに応援金をお願いしました。その時に感じたのは、「これがどう使われるの？」ということです。それで直接届けたいと言うことになりました。思っているのは、もっともっと小さい単位、ローカルメディアですが、もっとさらに小さい町内みたいな単位だったら、もっと応援する時にわかるのではないのでしょうか。いつかはローカルメディアを通じて、豊橋市の何々町と宮城県亘理郡亘理町、もしくは山元町の何々地区みたいな、何か小さな架け橋のお手伝いができたらという気持ちです。

【西村氏】

ローカル局は、本当に手が届くところの立場でいると思います。「ラジオの電波が悪いよ」とか、そういうことも、自分の耳でキャッチできます。いいと思ったら、そのまますぐに反映すればいいし、やはり一番立場に近い、目線が一緒ということでやり続けるのがローカルメディアの位置づけではないかなと思います。

【吉田氏】

私も同感です。マスメディアに対してローカルメディアというのは、等身大、自分サイズだ

など強く感じます。何と言っても温かい。「すごく揺れた時に、夜中に声を聞いたから安心した」と言ってもらった時に、「そうか」と思いました。安心は防災という意味での安心ではなくて、「同じ町に住んでいる人が、今、起きて同じように不安に思ったんだ」という安心、まさに共感です。それを生むことができるメディアなのだと感じています。

【森先生】

私たちは小さな町ですが、豊橋市をはじめとして、全国各地から沢山の支援を頂いてまいりました。とても恩返しすることはできないと思います。もし恩に報いるならば、力強い子どもたちを育てていくことでしょうか。家族とともにも仲良くなり、いざという時に、みんなで支え合う家族環境をつくり、整えていくということ。ご支援を頂いたこと、あるいはかけがえのない命として、命に代えて、色々と培った震災に対する想い、避難の仕方等、それを色々な形で伝える。その二つぐらいしかできないのではないかなと思います。私も1カ月前に現役を引退しましたが、何らかのかたちで少しでも力になっていければいいなと模索しています。

【森社長】

森先生、退任されても、ここへ来て、こうして話して頂いたことが、十分に伝わっていると思います。今、やって頂いていることが本当にありがたいと思います。

エフエム局は、皆さんのそばに寄り添っています。前川も言いましたが、一対一でしゃべり掛けるところで、寄り添っている。今回の震災もそうですが、「私たちは、あなたたちのことを見ていますよ」というメッセージを流すのが、私たちの仕事だと思っています。そして、声を出して話すこと、これもメッセージを流すことで、相手に伝えることだと思います。逆の立場で自分が見た時、自分たちは見てもらっている、見られている関係が成り立ってくるのが一番いいかなと思います。

「継続は力なり」だと思います。1回目、2回目とどんどん変わってきました。周りの方々も、ここにおられる方も「みんなの夢のかけ橋プロジェクト」といった形での繋がりも増えました。こうして続けていくこと、これが本当の防災に繋がっていく部分だと思っています。

我々は、ずっと続けていこうと思っています。色々な形で、ご意見を頂き、自分たちのものとして取り入れていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

【戸田先生】

今日は、「共感を生んだローカルメディアのつながり」というテーマで、宮城県の亘理町、山元町、それから、豊橋市の二つのローカルメディア、三つになるのかもしれませんが、これを介して繋がりを形成すること、今も続いています。これから両地域のことも考えながら、将来に向かっていく、そういう時であったと思います。

沢山の印象的な言葉がありました。「いい町には『声』がある」ということ、これは本当に等身大ですね。等身大の安心もありました。自分の目線で、安心が形成されています。人の心を穏やかにすることができる、そういう声で語り掛けられていることが、ずいぶん大切なことだと思いました。災害は大変なことです、どのように共有していくのか。森社長が言われた、体験して、共感して、そこから、次を考えると、初めて心が入っていくということも学んだように思います。

そして続けていくことが、支え合っていくことになるように発展するのではないかと思います。

パネラーの皆さん、長時間、ありがとうございました。以上で、ディスカッションを終了させていただきます。どうもありがとうございました。